

## ソフィスト文獻考

堀, 豊彦

<https://doi.org/10.15017/14407>

---

出版情報 : 法政研究. 13 (1), pp.97-114, 1943-03. 九州大学法政学会  
バージョン :  
権利関係 :

# ソオフィスト文獻考

堀 豊 彦

Hippothales

The building, he said, is a newly-erected Palaestra; and the entertainment is generally conversation, to which you are welcome.

Socrates

Thank you, I said; and is there any teacher there?

Hipp.

Yes, he said, your old friend and admirer, Miconus.

Soc.

Indeed, I replied; he is a very eminent Professor.

— Plato, "Lysis or Friendship" § 204. — (The Dialogues of Plato, vol. 1, tr. by B. Lowett, 3rd. ed. 1924, pp. 49-50.) (傍線、筆者)

—

ソオフィストといへば、その解義、批判、評價はもはや一般に決定的である。特異なる風貌を呈したる古典的ギリシヤ時代の一つの啓蒙期を舞臺として、そのいくらかの學問的貢獻と特徴ある彼等の性格を敘述し、而して末尾に排撃的擯斥的な反批判を附けておきさへすれば、それで大體間違ないものの如くになつてゐる。斯様に、その理會と解釋と批判とに謂はば一つの定型ができあがつてゐる、とても言つて差支ない程であり、従つてその研

究に當つても亦その解明においてもいささか安易なるかの想ひがする。しかも、ソフィストと呼稱せられしそれらの人々の活躍せる時代の特異性は暫くおいて、哲學の立場、政治學理論の領域、廣く一般文化の分野における彼等の學問的、文化的寄與に關して、その貢献も、その重要性も決して積極性をもつて遇せらるることではなく、せいぜい消極的なる貢献の役割を演じたるものとして、その存在の意義が認證せられることをもつて一般とするのである。加ふるに亦、上述の如き解義・評價すら彼等の世界觀や理説に對して、延てはその歴史的文化史的役割に關して厚意的なる性質を帯びたるものを選びたるに過ぎないのであつて、偏に嫌惡と冷笑と侮蔑と排撃とに終始徹したるものさへ珍しくないのみか、その類のものにして有力なる代表的なる、標準的なソフィスト解釋さへある、といふのがこの方面の現状である。従つて、ソフィストの立場やその文化的所産につき、合せてその一般文化的貢献について、それらの積極性を論證し擁護するが爲には、間接的な二次的な資料では到底不可能であり、いかにしてもソフィスト自身の、就中その代表的地位の人々の直接的資料、即ち論著乃至有力なる斷片が新らたに發見せられてそれに基づいて新しき解明、解釋、論證が試みられなければならない譯である。然るに、その様な源泉的資料の發見も新規には求められず、従つて、斯かる正統的解義に即しての解明の期待し難いことは必定であるとしても、他面、厚意ある解明、論證にして新らたに現はれたるもののあるも一向にこれを聞かないのである。

さて、ソフィストに關し、或は彼等に對する理會や批判の立場並に志向の厚意的或は拒否的たるの如何は別と

しても、およそ彼等に、而して彼等に關する研究につける事體にして、上述の如くであるから、尠く共政治學理説の分野にあつて新機軸を致したる新研究の提唱はないかの如くである。併し、既述の如くソフィストに纏はれる解義と批判とに所謂一般的定型的なるものが與へられてゐると考へられてゐるがためか、筆者の觀する所では少數者意見なる厚意的解義と理會とを、彼等に寄する所の僅かの、併し乍ら權威的學者の學說すらも一般はもとより學者の間に於てさへとかく顧慮せらるる所、極めて薄いかの觀がある。これはもとより筆者の淺學にして且つ涉獵狭いが故であらう事は、特に斷はるまでもない所であらう。そこで、この小稿はソフィストの立場や理説に對して濫かき理會を寄するすぐれたる學者の、僅かなる論著について謂はば目次のな素描的考證を豫定するものであるにすぎない。

ところで、ソフィストに附纏ふ不評は諸說歸一してはゐないが、一般的に定まれるものを採上げてみてもそこに別段深い意義がある譯ではない。試みに、それらを摘約して掲出してみるならば、大體下記の如きものとなるであらう。

第一には、彼等が人間研究、いひ換れば、人事の諸問題を徹底的に究明せんとした態度、並にその提唱せる理説が新規なる言説であつたといふことである。即ち、彼等の人間研究といふ事や、その態度が當時の人々、特に敬虔なる信念や傳統的信仰を有する人々に信頼を結び得なかつた、といふ事である。ソフィスト以前の自然哲學者すら當時の傳統的信仰を有する人々からは疑惑をもつて眺められ、彼等を表明する名辭は本來中立的意義をも

つ氣象學者乃至天體研究者といふものであつたが、同時にまた無神論者といふ面目なる汚名をも浴びせられることもあつた。Anaxagoras が世の冷遇を受けたのは斯様な原由に基くものであつたと云はれる。當時にあつてはギリシヤ哲學の濫觴以來纏綿として傳來しきたり、高貴なるものとして考へられし宇宙論につける哲學的思惟の所産に關與してさへ、なほ斯くの如くであるとするならば、夫等を一擲して通俗的に人事研究に、しかも現實的實證的態度を持してこれに當りたる、ソフィストが世の輕蔑を招いたことは強ち無根なことではなかつたのであらう。

第二には、彼等が貴族・富者の子弟を教導したといふこと、別して青年を刺戟し、延ては道義、倫理を蹂躪して頽廢せしめたといふことである。プラトンの記したる所に依れば、Protagoras の滞在したカリアスの家はアテナイの最も榮譽高き大家の一つであり、そして巨額の金錢をソフィストに支拂つてゐたと云ふ。こゝには當時のギリシヤはペルシヤ戰爭に輝かしき勝利を納めて、專制的なポリスの孤立的生活から人々を解放し、内において人間の力の自覺から衆民政治の擡頭を招來した。貴族や金權者は次第に高まりゆく民衆の勢威に抗するがため、の自衛手段を必要とした。茲にソフィストの雄辯、論難術がその所を得た理由がある。人はこの種の批難の蔭に民衆の高まりきたれる勢力と人間の自覺の高揚とを見出し得ると共に、そこにこそソフィストの出現を促した歴史的事由とを觀取し得るであらう。

第三に、彼等が概してアテナイ人ではなかつたことである。試みに著名なるソフィストについてこれをみるに

Protagoras は Abdera の人じあり、Gorgias は シシリーの Leontini の人じあり、Prodikos は Keos、Hippias は Elis の人々であつた。また Polus は Agrigentum, Thrasymachus は Chalkedon, Euthydemus は Dionysodorus は Chios の人々であつた。民族の矜持もさることながら文化的矜持を裕かに有したギリシヤ人に取り、異邦人の社會的跳梁並に文化的活躍をみることは決して快よきことではなかつたであらう。

第四に、彼等が物質的報酬を受取り多大の蓄財をもなした、といふことである。元來ギリシヤ人の人生觀は貴族主義的であつた。賃銀を受くるといふことはこの國では如何なる國々におけるよりも輕蔑せられた<sup>(5)</sup>。古來テーパーには十年間市場取引と無關係でなければ、公職に就くことを得ない、といふ規定があつた。プラトンやアリストテレスの、手工職人や商人は充全なる市民權を享受し得ざるものたるべし、といふ意見は他にも據る所はあつたが、斯かる賃銀關係に負ふ所も亦多大であつた。只これに關聯していささか例外的なのは醫者の如き者で、彼等の如く比較的少數なる報酬・賃銀獲得の職業人は市民權所持者一般と等しき社會的尊敬を享けるといふ事も、全然ないこともなかつた。併し、報酬・賃銀をうけて知識を授くる所の仕事をなす者への批難は何故か最も峻烈を極めた。斯かる者は、ソクラテスによれば、他に秀れたる能力ありながら自ら奴隸的仕事に耽ける者にして、墮落せる者として擯斥せられた。ギリシヤの政治形體が漸次衆民政治に移りゆくと共に裁判所における辯護人の業務が生じて來たが、この種の業務に就く者は不當なる報酬を受けるといふ點から、當時はソフィストと同様に喜劇における嘲笑の對象とされた程であつた。ソフィストの雄、Isokrates の如きは、その爲人、性格が生來眞

攀なる人であつたが、修辭・雄辯學の學園を開設す可く餘儀なくせられて最初の報酬を門弟より受取る際慚愧の涙を禁じ得なかつた、と傳へられてゐる。<sup>(6)</sup>

ギリシヤの古き傳承によればターレスやヒポクラテス (Hippocrates of Chios) の如き哲學者は研鑽の故には、或は家産を傾け、或は財富を蓄積し得る程の明があつても、敢てこれを受けなかつたと言はれてゐる。<sup>(7)</sup> それに比して Protagoras は古代ギリシヤ第一の彫刻家、フィディアス (Phidias, 490—433, B. C.) に劣らざる程の資産を作つたと言はれ、<sup>(8)</sup> プロタゴラスの第一の門弟 Prodikos は五百ドラクフマの受講料をとつたと言はれる。<sup>(9)</sup> これらが清廉なる哲學者的態度からみてソフィストが俗惡家として侮蔑せられたのである。名利と財とを求むる心は昔も今も變らざる人の世の恒でありながら、ソフィストは不運にもこの故に劇しく排撃せられた。その故か彼等をこの不運なる打擲から救拯し、辯護せる、後世の學者の言説はまたこの點に多くの力が注がれてゐる。

第五に、上來列擧しきたりし諸事由にも増して効果的影響を與へたものは、有力なる卓越せる人格者にして優越せる文筆力を所持せる者の、自發的な意識的な目的に基く事由を擧げなければならない。即ち、プラトンの強烈なる、執拗なるまでにも徹底せるソフィスト排斥である。ユムヘルツ (Theodor Gomperz) はこれを如何に誇張的言辭をもつて現したとも解釋せられるが、この間の消息につき止目に値し、且つその類の紹介、表現の故に或は却つて紙背に徹すると思はしき一面の事理を、いみじくも解明し得てゐる。即ち、プラトンは自己の學説と學派とをソフィストの夫等と混合せられること、乃至はいささかなりとも類似せる所ありとせらるる事を畏れ、

自己の立場を後者より判然區別せんことに痛く腐心した。まことに彼の如き天賦の才能と高貴なる家門の背景とに恵まれし者が、ギリシヤ人の實踐的世界觀の人生態度たりし所の公的生活の白日の中に榮譽と權力とに充ちて生活することの代りに、學園の影のうちに『僅かなる子弟と樂しげに語合ひつゝ』語を鍊り、想ひを分析して靜かに教授に沈潜したといふ事は、當代にあつては何人よりも彼の近縁・近接の者より不可思議に思はれた事であつた。このことは、彼をして、自己の獨自の至高なる立場、即ち人間性に目標付けられし根源の再生を、ソフィストの卑近なる目的に向けられし業績と、顯著に對立せしむ可く努力せしめたのである。このことは彼の師ソクラテスが當時の人々によつては全然、或は尠からずソフィストと同類と考へられてゐたにも拘はらず、彼の努力により、幾分の無理が全然ないことはなかつたが、ソフィストとは全く異り、後世の記憶の光榮ある位置に立たしめられたことによつてもこれを窺知し得る、と。斯かる理會の仕方は表顯的にはプラトンの對話篇のみを採上げてゐるが、人はこれらの背後に當期のギリシヤ、特にアテナイの社會的風汐を、而して更に廣く且つ深くギリシヤ的正統的精神の歴史性をも考慮す可きであらう。このことは他面われわれをして郷土、祖國、歴史のありかたの一面をも考へせしめるものがある。

上來述べきたりしが如き諸點がソフィスト不評の主要なる理由乃至事由である。聊々、ソフィストと呼稱せられし人々は同一學派を形成組成したものではなかつたからして、ソフィストの範圍・限界を定立することは出來



難い譯であるが、ソフィストと呼ばれし人々、或は自ら斯く名乗りし人々の間には、Protagoras や Isocrates や Gorgias や Prodicos 等々の如く、ともかくも卓越した人々にも乏しくはなかつた。併し、中には如何がはしき者も多く、夫等の似非知者やそのエビゴーンが世人の批難、擯斥に値するが如き言説や行動を敢てなす者が、時代の轉換期、即ち民論の擡頭、躍動せる時代に、而して民衆の政治的活躍を廣く、しかも急激に誘發せる古典的ギリシヤの特異なる政治社會において跳梁して、健實なる正統的ギリシヤ精神と道義とを動搖せしめた際、それらが心ある人々の輦燈と輕蔑とを招いて排撃を蒙つたといふことは寧ろ當然な事理である。併し、輕薄なる徒輩の所在、活躍は大なり小なりに何時の世にも絶ゆることなき、人の社會の恒でもあり、ソクラテスやプラトンが謂はば終生を賭してひたむきなる心身を注いで、その超克に當つたものは斯かる亞流の徒輩を對象としてではなかる可きであつた。かく考へ來たれば、如何に特異なる時代と獨特なる社會とを歴史的所與として受容れるとしても、上掲の如き諸種の事由が斯くも重要な意義と結果とを生起せしめたとは洵に理會に窮せしむるものがある、と言はねばならない。しかもその諸事由のうち、報酬受理とプラトンの挑戦排斥とが、結局ソフィスト不評の最も根本的原因であつたといふことを考慮するとき、われわれは愈々以て事體全貌の荷ふ意義の不可思議に驚かざるを得ないであらう。再びゴムペルツに聞けば、彼がソフィスト惡評の主因を解説敘述したる末尾にそれらを要約して、結局『言葉の恣意』(Die Laune des Sprachgebrauch) と『假令全時代を通じての最大のものに非らずとするも、一大文筆の天才』との二つの屈服し難き強敵が結合してソフィストに當つた、と述べた事はま

た表現の巧みを味はしめるものがある。とにもかくにもソフィストは悪評と汚名に包まれたる不運なる星の下に生きた人々であつた。

## 二

われわれは既に世の多くのソフィスト解義並に批判の概要について述べ、就中プラトンが徹頭徹尾ソフィスト的啓蒙の超克・排斥に力を致したことを顧みた。洵にプラトンのソフィストへの論難は強烈を極め、その諷刺も亦辛辣、鋭利であつた。彼の對話篇の多くがこれを示して居り、そこでは輕蔑と嘲笑とが彼のソフィストへの態度の總ての様であつた。併し、彼にも一つの例外と稱す可きか、ソフィストに對して善意・厚意を寄せた場合が全對話篇中、只一箇所だけは尠く共あることを知り得るのは、思想史の斷層に注目する者の心に潤ひを與へずにはおかない。即ち、それは彼の對話篇『リシス』のうち、ソフィスト *Nicocus* に關する言表である。(本稿冒頭掲出、參照) それにしてもプラトンが賞讃の意を表明したのは僅かに一行にも充たざる簡單なるものであつたし、*Nicocus* その人は決してソフィストと呼ばれる者のうち主要なる人物ではなく、プラトンの斯くも簡略なる片言雙句をしも無かつたならば、恐らくはその名が世に知らる可くもなかつたであらう程の人であつた。

それにつけても、ソフィストに對して溫き理會を寄せ大方の批難排斥に對して、彼等を辯護し、彼等の立場と理説、主張とに厚意的解義を樹立披瀝したる學者がなかつたのではもとよりない。但し、それは慥かに少數では

あつた。従つてこれらは學界における評説としては少數者の意見とも稱す可きである。併し乍ら、それらのうちには所謂定説乃至支配的見解に對して事更に奇異を衒ふがための獨善者流の言説ではなかつたと言ひ能ふものが存する。然るに、それらが兎角看却せられ勝ちなのである。この小稿は前述の如く以下それらの文献につき、謂はば目次的素描を試みるであらう。

そもそも、ソフィストには後世に遺す程の論著がなかつた。E. Barker がその著 *Greek Political Theory, Plato and His Predecessors*, 2. ed. 1925. のうちに附録的に英譯して挿入せる、ソフィスト Aniphon の『眞理について』なる二つの斷片の如きは、この類の文(獻?)としては寧ろ稀有に纏れるものと言ふ可きであらう。それは要するに、ソフィストの原始的自然的理説である。ソフィスト自分の筆に成れる文献の寥々たること斯くの如しとして、これに加ふるに、彼等が講述せる所が後世に傳承せられることも亦極めて薄かつた。彼等は既述の如く多くギリシヤにおいては異邦人であり、概して定住の處を持たず、異境にありてさまざまなる生活の苦闘を相互間においても展開したのであり、彼等の間には何等の統一ある學派も結成されず、更にその講述せる處を記録し或はその手記を残し、或はその生きたる記憶を記述して保存し、且つこれらを整理編成して後世に遺した所の忠實なる門弟も彼等には一般になかつた。このことは他方にソフィストに對する論難の有力な、且つ價值高く美はしき精神的所産が幸運にも殘存せることあるの事實と比較するとき、彼等の不幸と不運と不利とは蓋し多言を要さぬであらう。ソフィストの文筆的所産は彼等の逝いた僅かの數世紀後においても、人に知らるるもの極

めて僅少であり、僅かに貧弱なる斷想斷片のみであつた。しかもこの僅かなる斷片のみが後世のソフィスト研究に直接使用し得るものにすぎず、斯く源泉的資料なきものに對して周到なる科學的研究が施こされないのも敢て不思議ではない。源泉的資料の欠除に加へて、師の衣鉢を傳ふる良き門弟を有たなかつたことはいかにも彼等の不幸であつた。これらの事情にかつて加へて、ソフィストの言説を最も豊富に後世に傳へたものが、皮肉にも彼等の最大の批難者プラトンの諸對話篇なのである。しかも對話篇の性質上言説の表現は真相を歪曲することも多々ある可く、加ふに、もともと厚意を抱かざる觀點よりして屢々好んでソフィストの思想、言説へ對して辛辣なる諷刺をもつて愚弄せる筆致の跡を辿つて、その正しき理會の攝取把握に努めなければならぬのである。従つて、そのことは表象の機微に通曉し、言表の心理のデリカシイを洞見するの豊かなる理解力と、他方時代の一般的文化的精神的志向の性格や内容を消化して認識する、たくましく悟性を以て當らねばならない。斯様な意味において、われわれの手近に使用し得る權威ある文献として、Theodor Gomperz の Griechische Denker, Eine Geschichte der antiken Philosophie 3 Bde. (4. Aufl., 1922-1931) の如きが舉示せられる。<sup>(3)</sup> この著者自らはソフィストに對して特に積極的に濫き理會を寄せるといふ立場に事更に立脚するものとは定め得ないであらうが、この書は斯かる志向の線に副ふものとして考へて差支なく、且つ著者のギリシヤ文化、ギリシヤ哲學につける豊かなる知識・識見の故にソフィストに關する多彩なる多量なる知識を包藏せる文献である、と稱す可きである。

先きにソフィスト不評の理由中、彼等が物的報酬を受けたことが極めて重要な意義を荷ふものであつた、と

述べたことであつた。今茲に Comper の紹介の意をもつて彼がその問題に對する所説を要約して述べし所は、彼のソフィスト觀の一面を或は端的に摘要し得るかも知らない。彼はこの點においてソフィストを庇つて下記の如き趣旨にこれを解明するのである。

即ち、ソフィストはその代表的人物も亦その一般も概してギリシヤに取つては異邦人で、夫々己のが郷關を後にして當時の文化の中心アテナイに移り來たつて生活せる人々であり、この點、既にアテナイの自由市民たりしソクラテスやプラトン等とは大いに事情を異にした。(ソフィストにしてこの場合例外的なるものは、イソクラテスで、彼はアテナイの人であつた。) ソフィストは何等國家的恩啓・援助を受くるものではなく、生活のためには物的報酬を現實に必要とせざるを得なかつた。加ふるに、彼等相互間の競争も亦激しく、此等の事情は勢ひその實際生活の諸方面に深き影響を及したのであつて、プラトンの如く身自ら富裕なるアテナイの門閥の家に人と成つたものとは自ら異ならざるを得なかつた。併し、知的勞務において報酬を受くるといふことが當時の社會通念において如何に侮蔑に値する行爲であつたにしても、且又ソフィスト中には時として不淨の財富を積む者があつたにしても、ソフィストは不運なる時代に遭遇せる、異境に戰へる淋しく貧しき學徒であつたと言はねばならない、と言ふのである。<sup>(13)</sup>

ソフィストにつける古來の傳統的見解に對して敢然反駁の見解を樹立して、彼等をそのあまねき不評より救拯せんとすの意圖の下にソフィスト論をなした學者として、Georg Grote (1794-1871) の名と、その不朽の名著 A.

History of Greece, 12 vols. 1843—1856 は餘りにも著聞に亙るであらう。併し乍ら、Grote のこの高名なる著述の、而してその全卷中ソ、フィストに關する有名なる第六十七章<sup>(註)</sup>の出でざる既に五ヶ年以前に、Georg Henry Lewes (1817—1878) はソ、フィスト辯護の論述を公刊した事であつた。<sup>(註)</sup>蓋し、その勞作は Hegel の Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie, 1820. に、而して又直接 Hegel 自身の教導に、示唆せられ嚮導せられて結實をみたものであらうと解せられる。われわれはヘーゲルにより、且又ヘーゲルにおいて、最も正當に、又最も嚴肅に、あらゆる哲學はその時代を反映するものであることを教へられると共に、ヘーゲルの發展につける矛盾の根本的統一の法則の理念は、また進んでソ、フィストの哲學、思想、理説に、その場を與へることに於いて、ソ、フィストを近代に再生せしむるに力強く働いたものであつたことを知る。然りとすれば、ソ、フィストの哲學、思想一般について、又その文化的寄與の積極的意義について、われわれはグロートやルウイスに聽くと共に、またより基本的にヘーゲルにその根源を仰がねばならなくなる。かく觀てくれば、ソ、フィスト研究はそこから新生面を展開するであらうから、かの所謂定型的解説や批判のみに終始して晏如たる譯にはゆかなくなるであらう。茲にグロート、ルウイス及びヘーゲルの三人を擧げたが、もとより彼等のソ、フィスト觀には夫々相互間に相違する所も尠くはなかつた。譬へば、グロート並にルウイスの兩者はソ、フィストの懷疑的・急進的傾向を能ふ限り極小化せんと努力したに對して、ヘーゲルは左様な特異性を際立たせしめようと試みたが如くである。ソ、フィストは前示の如く單一の學派を結成せる人々ではなく、相互間に別段連絡などがあつた譯ではないし、斯様な點か

らしても種々の思汝、傾向を表明してゐた。上記の辯護者的な三人の學者にありても、夫々各自の強調を置く志向を力強く採上げて各自自らの選擇する面を以て全層面を統括するものとして取扱つたのは是非もないことであつた。ヘーゲルに取つて、ソフィストは主として主觀主義的觀念主義者であり、ルウィスに對しては修辭學者であり、グロートに取つては、ソフィストは恰も彼等の時代の規準的見解の代表者として存立した。ルウィス及びグロートは共に本來的なるソフィストはギリシヤ社會の道德を頽廢せしめたものではない、といふことを立證することを特に念とする所があつた。グロートはこの點で更に進んで、ソフィストに寄せられし道德頽廢の汚名は單なる幻想に過ぎざるもので、ペロポネス戰役後のアテナイ人の徳義は馬拉トンに奮戰せる彼等の祖先の時代の夫れに、いささかも遜色はなかつた、とさへ主張する<sup>(17)</sup>。彼のこの見解は後、卓越せる一代のギリシヤ學者 B. Jowett にも支持せられてゐる<sup>(18)</sup>。併し乍ら、グロートのこの見解には可なりの誇張と興奮とを見逃し難く、且又彼はこの點におけるプラトンの眞意を果して正しい仕方において理會してゐるかに關しては疑問がある。

ただ、ソフィストと呼ばれし人々が共通なる理論を所持したものであるのではない、といふグロートの所説は今日では一般的支持を得てゐる。然るに、Brandis はこれに反して彼等を共通なる原理と志向とを有する一學派として取扱ひ、彼等は才能ある人々ではあつたが、知識を夫れ自體の爲に求めずして、夫れを『外形的な利己的なる目的』の達成の手段として學問、知識の切賣りをなした輩として規定した<sup>(20)</sup>。今、この様な批難が適正に該當し得る事例をソフィストに對して求むるとすれば、それは恐らく Gorgias とその門下の修辭家達のみであらう。人

は謂ふ所の『外形的な利己的な目的』が Prodikus や Hippis が教述した自然哲學に依つて、如何程助長せしめられたかについて見究め得ないであらうし、また Protagoras の人間文化と純粹認識に對する綜合的探求が、彼が門弟を蒐め、報酬を徴したといふ事の故に、侮蔑的に誹謗せられて至當であると、如何なれば論結し能ふのであらうか。獨乙學界におけるギリシヤ哲學の碩學 Zeller もソフォリストを以て學術の教師として規定したが、なほ彼等は眞理の科學的探求者に非らずして、個人的教養を單に目的とした——die formelle und Praktische Bildung des Subjekts——として低く評價した<sup>(2)</sup>。この種の謂はば第二義的主要點につける修正的解義は恐らくグロートを満足せしめないであらう。而して、ソクラテスについて考へてみても、彼も亦知識や認識を實踐から遊離しては考へなかつたのである。ソフォリストの哲學や思想、延てはその政治學理論に關しては或は克服せられ、或は是正せらる可き、數々の點があるであらう。併し乍ら、彼等に對して、譬へばプラトンの下したる解釋、批判の如きを恰もその理會の大綱としてのみ構成定立せられたるが如き、在來一般のソフォリスト觀は或は却つてその眞相を把握し能はぬ節があるときへ考へられる。この點においてせめてグロートの原著は新たに讀みかへさるる價值があるであらう。グロートの『ギリシヤ史』はソフストに關してたしかにその歪曲せられし見解を是正するに貢獻する所が多であつた。この原著はその文體さまで難澁ならざるにも不拘、或はその浩漭なるが故にか熟讀せらるること薄きを思はしめる。

以上概説したる諸文献の外に讀閱を要望したいと思ふ文献は、Alfred William Benn の The Greek Philoso-



phers (2 vols. 1882) である。尤もソフィスト啓蒙の文化史的意義を克明に詳述せる學界の權威的文献は、何んと言へば Eduard Zeller の *Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung* (6 Bde. 4 Aufl., 186) であらう。而して、政治學理説の研究においてイギリスの學界は古典的ギリシヤ時代に重點と關心を示すこと特に深いかと考へられ、それ故にか、そこに前掲のルウイスやグロートの如き業績も結實したのであらうか。筆者が常々に一讀したいと念じつつも、資料の入手が叶へられず、もどかしくも一抹の寂しさを覺えてゐる文献は下記の如きものである。即ち

H. Sidgwick, "The Sophist" (*Journal of Philosophy*, vol. iv, Cambridge, 1872.)

E. M. Cope, "On the Sophist" (*Journal of Classics and sacred Philosophy*, vol.ii, Cambridge, 1855.)

F. M. Cope, *On the Sophistical Rhetoric* (*ibid*, vol. iii, 1857)

これらのうち Cope の論文はグロートの所説への博識ある包括的なる批判である、と言はれるだけ一層讀了學の想ひを唆られてゐるのである。それにしても識者の常に言ひ古したることながら、本邦學界が古典・原典や權威的論著に存外無關心なるかの態度並に現状は洵に遺憾な次第である。

【註】

- (1) Platon, Politeia, 493a  
Platon, Phaidon, 40.
- (2) Gomperz, T., Griechische Denker, Eine Geschichte der antiken Philosophie, Bd. 1. 4. Aufl., 1922, ss. 345—346.
- (3) Platon, Protagoras, 337.
- (4) Platon, Apologia, 20.
- (5) Gomperz, T., a. a. O. s. 346.
- (6) Gomperz, T., a. a. O. ss. 346—347; s. 484 註
- (7) Meyer, Geschichte der Altertums W. § 516.
- (8) Platon, Menon, 91.
- (9) Platon, Kratylos, 384.
- (10) Gomperz, T., a. a. O. s. 347.
- (11) Gomperz, T., a. a. O. s. 351.
- (12) Barker, E., Greek Political Theory, Plato and His Predecessors, 2. ed. 1925, pp. 83—85.
- (13) Gomperz, T., 前掲原典全三卷中の課題を所載する分は第一卷に収められたる。
- (14) Gomperz, T., a. a. O. ss. 343 ff.
- (15) Everyman's Library 中の譯註が、Grotes A History Greece, 12vols, 1905 中のその課題を述べた章はその第一卷に収められたる。
- (16) Lewes, G. H., The Biographical History of Philosophy, 1845—1846.
- (17) Grote, B., ibid, pp. 334—336.

- (81) Jowett, B., *The Dialogues of Plato*, vol. IV., p. 380.
- (82) Grote, G., *ibid*, p. 333.
- (83) Brandis, *Geschichte der Entwicklung der griechischen Philosophie*, Bd. 1, s. 204
- (84) Zeller, E., *Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung*, Bd. 1. 3. Aufl., s. 943.
- (85) Bann, A. W., *The Greek Philosophers*, vol. 1, pp. 57-107.
- (86) Zeller, E., a. a. O., ss. 932-1041.